さぬきプログラム５年間の記録と今後の展望

高水　徹、塩井　実香、ロン・リム
香川大学インターナショナルオフィス

Five Years of Sanuki Program: A Reflection and Prospects for the Future

Toru TAKAMIZU, Mika SHIOI and Lrong LIM
International Office, Kagawa University
Email: takamizu.toru@kagawa-u.ac.jp

要　旨

さぬきプログラムは、留学生センターが提供する交換留学生向けの１学期プログラムである。英語能力または日本語能力を要件とする以外は、専攻分野の限定されない一般的なプログラムである。同センターの２週間受け入れプログラムでの経験に基づき、国費留学生の予備教育コースを基礎として成立した。開始は2014年10月で、それから５年間（10期）で61名の交換留学生を受け入れた。開始後の拡充の過程において、一部科目の共修化・アクティブラーニング化を行い、英語により本学全体の先端的取り組みを学ぶ新科目を追加し、様々な日本語レベルの学生を受け入れられるように発展してきた。運営面では、定例ミーティングの実施、歌の学習の取り入れ、冊子の発行などにより、学生の留学体験を改善してきた。今後の展望としては、ブリッジプログラムとして機能させること、日本語・日本文化以外の側面の強化、プログラムのさらなる特徴づけなどによる内容面の充実と、受け入れ大学の拡大や奨学金の活用による受け入れ人数の増加が考えられる。

キーワード　さぬきプログラム、留学生受け入れ、背景、拡充、展望

１．さぬきプログラムの概要および開始の背景

本稿は、さぬきプログラムの開始（2014年後期）から第10期（2019年前期）までを対象とした実践報告である。

さぬきプログラムは、香川大学インターナショナルオフィス留学生センターが実施する１学期のプログラムで、主な対象は協定大学からの学部レベルの特別聴講学生（交換留学生）である。学生の所属大学における専攻分野は特に制限しておらず、本学においては日本語・日本文化に関する科目を中心に受講する。語学要件としては、英語能力または日本語能力を要求している。学生の香川大学における所属は、インターナショナルオフィスとなる。

本プログラムの背景として、留学生センターが設置時より有していた日本語研修コースの存在がある。同コースは、基本的には国費留学生の予備教育を担うコースで、日本語および日本事情科目により構成されていた。予備教育段階における国費留学生以外にも門戸を開いてはいたが、コース自体が集中コースであったため、国費以外の学生の受講が多かったわけではない。

本学における予備教育には、常に留学生が配置されてきたわけではないため（塩井2019: 131を参照)、留学生の配置がない場合にはコース運営上の問題となった。すなわち、直接的な所属学生がおらず、集中コースとしての予備教育の受講生が見込めないため、コースを大幅に縮小して実施しなければならなかった。このように実施が安定しなかったため、全学的に本コースが認知されにくいという悪循環も生じていたと考えられる。

もう１つの背景は、協定大学からの交換留学生の受け入れが難しかったことである。一般的に各学部における学部レベルの交換留学生受け入れにおいては、ある程度以上の日本語能力が必要となる。受け入れた留学生が受講する科目が、ほとんどの場合日本語で実施されるからである。特にアジアの国々においては、日本に留学したいが学部のプログラムに参加できるレベルの日本語能力は有していない留学希望者が多く存在していた。加えて、日本語自体を主な学習対象としたい学生も少なくない。

さらに、本学の側にも、留学生をより受け入れたいという希望があった。香川大学は、大学全体として４＆１プランを推進しているが、このプランは受け入れ留学生を400人にすることを目指したものである。その実現には、単に条件に合う留学生をリクルーティングするだけでは不十分であり、留学生が「来やすい」プログラムを提供する必要があった。特に交換留学生にとって、留学の要件のうち最も満たしにくいものは、日本語能力であると考えられる。日本語による授業の受講に必要な日本語能力は、文系の諸分野においては比較的身に付けやすいと考えられるものの、それでも所属大学の状況により必ずしも容易とは言えない。一方、理系分野においては、より難易度が高くなる。一般的に、大学院以降における論文の使用言語は英語であることが多く、日本語学習の必要性が高くないからである。したがって、このような状況に置かれた留学生に対し、日本語能力を要求しないプログラムを提供する必要性があった。

上記のような背景に加えて直接的な契機となったのが、本学の協定大学であるブルネイ・ダルサラーム大学からの受け入れプログラムに関する要望である。同大学は、すべての学生にDiscovery Yearを課しており、その中で多くの学生は「留学」を選択する。その留学先の１つになりうるプログラムを提供してほしいという趣旨の要望であった。同国全体において、高等教育は英語で実施されており、学生は高い英語能力を有している一方で、日本語クラスは数の点でもレベルの面でも限定されており、同大学の学生が日本語による講義に対応する日本語能力を習得するのは容易ではない。

２．プログラムの設計

上記のような背景から、プログラムの設計には、①国費留学生の予備教育コースを基礎とするものであること、②日本語能力を要求しないこと、③派遣元大学における専攻分野を問わない、一般的なプログラムであること、の３点が求められた。

①について、留学生センターの役割として、国費留学生の予備教育は必ず担わなければならない。そのための日本語研修コースについては先に触れており、本センターが日本語教育を提供する場合にはこのコースを活用するのが合理的である。別の観点からは、日本語研修コース以外に全く別のコースを改めて提供することは、対象学生の日本語レベルが同等のコースが複数存在することになり、非合理的である。

②については、プログラム開始時点では、対象学生の日本語能力を入門レベルに限定していた。１つは、当時の本学における日本語科目の提供は初級レベル及び中級以上のレベルに偏っており、両者の中間のレベルの日本語科目を本センターが提供できていなかったことである。もう１つは、一定程

度以上の日本語能力を有する学生は、そもそも従来の各部局による交換留学プログラムに参加することが可能であり、実際にそのルートで留学してきていたからである。

③の背景には、本センターの学内での位置づけがある。すなわち、本センターは全学的組織であり、特定の学問分野を探求する各部局の立場とは異なる役割を担っている。そのため、プログラムの趣旨及び内容を理解していれば、派遣元大学においてどのような分野を専攻している学生であっても、受け入れることができる。

以上が本プログラムの設計において重要な事項であった。さらに付け加えなければならないのは、本センターは日本語・日本文化に関する２週間の受け入れプログラムについて、経験を有していたことである。このプログラムについては、『香川大学留学生センター 日本語語学研修プログラム報告書（第１回～第10回）』および『香川大学留学生センター 日本語語学研修プログラム報告書（第11回～第20回）』に記載している。２週間プログラムの１つの狙いは、より長期のプログラムに学生を誘導することであったが、この点での成功例は残念ながら数多くはない。しかし、１学期間のプログラムであれば２週間のプログラムよりはその効果を期待しやすいのではないかと考えた。

上記の方針でプログラムを作成したため、先に述べた通り日本語能力は要件としていない。一方で、学生にはある程度の英語能力を要求している。プログラムには英語による授業を一定数含めるためであり、また、学業上の指示や日常の注意事項を伝達する手段として日本語を用いることができない場合、コミュニケーションのツールとしては英語を用いるほかに方法がないからである。

３．さぬきプログラムの開始

2014年10月、本プログラムは最初のプログラム生をブルネイ・ダルサラーム大学より受け入れた。これが本プログラムの開始である。その際、本プログラムのプログラム生（１期生）としては１名のみであったが、１名のみでの学習という状況になったわけではない。国費留学生がクラスメートとなったためである。

その後の５年間（10回）で、表１のようなプログラム生を受け入れてきた。10期生対象のプログラムは、2019年８月に終了した。

年	学期	期	ブルネイ	台湾	タイ	インドネシア	韓国	カンボジア	ドイツ	計
2014	後	1	1							1
2015	前	2	3	1						4
	後	3	3		1					4
2016	前	4	2		1					3
	後	5	1							1
2017	前	6	4	3	6	2		3	1	19
	後	7		1	3	1				5
2018	前	8	2	5			1			8
	後	9	2	5	2					9
2019	前	10	2	4		1				7

表１：さぬきプログラム生数（特別聴講学生および科目等履修生）

年	学期	研究生		教員研修		日研生		計
2014	後			2	コスタリカ インドネシア	2	ポーランド メキシコ	4
2015	前	2	バングラデシュ					2
	後					2	ミャンマー メキシコ	2
2016	前	1	セネガル					1
	後							0
2017	前							0
	後					1	タイ	1
2018	前							0
	後			1	マラウイ	2	韓国 キューバ	3
2019	前	1	ガーナ					1

表２：同時期の国費留学生数

さぬきプログラムは、日本語・日本文化のプログラムとして開始しており、現在でもその側面が強い。日本語に関しては、開始時には完全に初級ないし入門レベルに限定していた。つまり、日本語の発音およびひらがな、カタカナから学習を始めるレベルのコースである。日本文化については、「初級日本事情」、および、「プロジェクトさぬき」を有していた。

初級日本事情は、日本社会に関する様々な内容を英語による講義で学ぶ内容であり、留学生の理解度や能力に配慮がなされている。

プロジェクトさぬきは、個々の学生が香川県に関連するテーマを設定して主体的に調査を行い、最終レポートの形にまとめて発表する内容であった。ただし、同科目は下記の通り2017年度より異なる形態での実施となった。

６期生の学習の様子

４．さぬきプログラムの拡充

4.1. プロジェクトさぬきの共修化・アクティブラーニング化

プログラム開始時において、「プロジェクトさぬき」は学生個人がそれぞれ香川県に関連したテーマを選択し、その探求の結果を最終レポートとしてまとめる形式であった。学生たちは様々なテーマを選択することができ、作成の過程では他の学生たちの取り組みに刺激を受け、実質的に３か月程度の取り組みであるにもかかわらず、構成や説得性の点で成長を遂げていた。

一方で、上記のように個々人の取り組みが主体となっていることは、半年間の留学における最終レポートとしては、学生にとって困難になりすぎる可能性があった。公平性のために明記しておく必要があるが、全ての学生にとって困難であったわけではない。余裕をもって仕上げる学生もいれば、最初は教員に不安を感じさせたものの、最終的には平均を遥かに上回る完成度のレポートを提出した学生もいた。しかし、そこまで到達できない学生がいたのも事実である。加えて、このようなプログラムにおいては、学生個々人の作業よりも、留学生同士の共同的な取り組みを重視すべきではないか、あるいは、日本人学生との学問的交流を重視すべきではないかという点が、実施時に常に課題となっていた。

そのため、2017年度より、同科目を日本人学生との共修科目へと変更した。同時に、個人のレポートではなく、グループ発表を最終発表の形態とした。ただし、簡易化した形で個人レポートも残した。さらに、学生個々人の負担が高くなりすぎないように、必ずしも現地調査等をする必要はなく、文献・資料の活用でよいこととした。これらの変更により、同科目はアクティブラーニングによる留学生及び日本人学生の共修科目となった。

4.2. Leading Edge Issues in Kagawa Universityの導入

さぬきプログラム開始の１つの意図として、同プログラムの効果により、留学生をより長期の留学へ導くことがあった。しかしながら、より長期の留学における学習・研究内容は、基本的には日本語・日本文化ではなく、各学部・大学院における専門領域である。しかし、同プログラムの受講中においては、本学の専門領域に触れる機会が少ないという課題があった。ただし、そのような機会が全くなかったわけではない。特別講義等[(1)]の形態で、他部局の協力を得て本学で扱われている複数の分野に接する機会を提供していた。

そこで、オムニバス形式により、各学部やセンターがそれぞれの領域を紹介する形式で講義を提供することとした。その際、英語による授業であることを明示する意味合いもあり、「Leading Edge Issues in Kagawa University」という名称とし、日本人学生も受講可能な全学共通科目とした。本科目の提供は、さぬきプログラムの学生に日本語・日本文化以外の科目を提供することに加え、日本人学生には英語による授業受講の機会を提供することになる。後者は全学的なキャンパスの国際化への１つの手段となる。

本科目は2019年度前期に開始したクォーター型科目で、本稿対象の留学生の中では10期生のみ受講することができた。

4.3. 様々な日本語レベルの学生の受け入れ

先の表１の台湾からの学生数が表わしているように、さぬきプログラムでは途中から国立嘉義大学（台湾）の学生を受け入れるようになった[(2)]。さらに、自国において奨学金を獲得したドイツからの

学生も受け入れた。このような事例の増加につれて、当初の想定である日本語入門段階の学生ではなく、日本語能力がある程度以上ではあるが、N2レベルには達していない学生を受け入れる機会が増加してきた。

このような場合、さぬきプログラムにおいては全学共通科目の日本語科目を活用しつつ、留学生センター開講の日本語科目（単位付与なし）も受講させることで対応してきた。これらの科目はある程度柔軟に学生に対応できることもあり、幅広い日本語レベルの学生を受け入れることが可能となった。

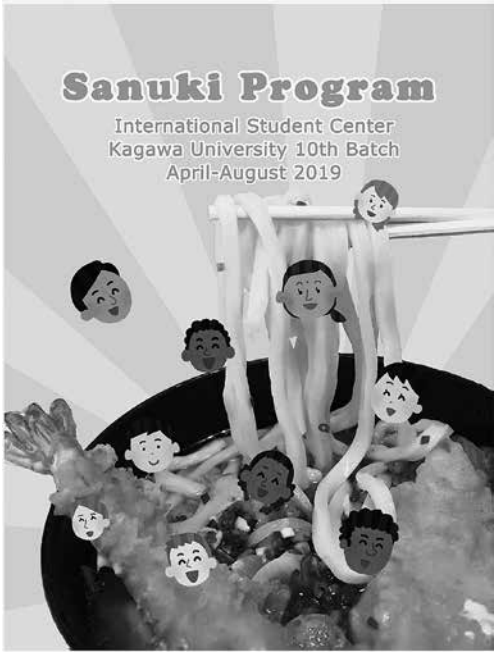
N2以上の日本語能力を有する学生も、同様の対応が可能であり、実際に11期生には中国及び韓国からの当該レベルの学生が本プログラムに参加している。このように、対象日本語レベルを広げたことで、従来であれば学部によるプログラムへの参加を検討していたと考えられる留学生の一部について、本プログラムへの参加が見込めるようになった。

4.4. プログラムの運営

初期の段階では、本プログラムを受講する交換留学生、および予備教育中の国費留学生がほぼ同じ授業に出席していたため、必要事項の伝達等は、授業の前後等に容易に行うことができた。連絡内容もそれほど複雑ではなかった。しかし、上記の通り学生が多様化するにつれて、運営上、より効率的な方法を模索する必要が出てきた。そこで、毎週水曜日に定例ミーティングを実施することとなった。

このミーティングの開始により、事務的な伝達事項、必要書類の回収、生活上の指導等に加え、より出席授業が分散化した学生たちのプログラム生としてのアイデンティティを形成しやすくなった。

ミーティング定例化に若干先立って、プログラム生（含 国費留学生）は日本語の歌を学習し、修了式で披露するようになった。加えて、10期生からは『さぬきプログラムマガジン』[(3)]を発刊するようになった。この冊子は、１人につき１ページのプロフィール等の内容と、１ページの写真により構成されたページを含んでおり、プログラム受講の記録及び記念になることを意図したものである。さらに、学生たちには本冊子を広報活動に用いることも伝えている。



10期生作成の表紙

５．今後の展望

上記の通り、本プログラムは当初は不安定な部分もあったものの、５年の間に受け入れ人数の点、内容の点で発展してきた。今後もその両者について、継続的に発展させていきたいと考えている。ただし、人数に関しては大規模なものにまでするつもりはなく、現時点では国費留学生も含めて20名程度がインターナショナルオフィスとしての上限であると考えている。

拡充の１つの方向性としては、本プログラムをブリッジプログラムとして機能させることである。基本的に半年のプログラムである性質上、プログラム開始時点である程度の日本語力の制約は必要となるだろう。例えば、N3程度の学生を受け入れ、その後本プログラムで日本語能力を向上させ、修了後に学部によるプログラムに移行する形が考えられる。より「本格的」なブリッジプログラムにおいては、学生は学部の卒業時に本プログラムに参加し、その後大学院に入ることになる。

10期生たち

実際、これらの可能性は具体的に検討された。１つは、本学の農学研究科における日本語によるプログラムの専門に関する基準を満たした学生が、日本語の要件を満たすために本プログラムを活用する可能性である。この方法は、制度的、経済的な理由で実現しなかった。もう１つは、国立嘉義大学からのダブルディグリープログラムの提案に関する、本学からの間接的な提案としてのブリッジプログラムである。つまり、本学の特定分野におけるダブルディグリーの実施は現状では難しいので、代替案としてブリッジプログラムを提案した事例である。この方向も直接的な回答にはならず、現在のところ進捗はしていない。

上記の本格的なブリッジではなく、もう少しカジュアルな形での先行事例はいくつか有しており、それ自体は有意義に機能したが、数を増やすという点では、上記のようなシステムとしての形が望ましい。

本プログラム拡充の別の方向性として、日本語・日本文化以外の側面を強化していくことが考えられる。具体的には、様々な分野の授業を提供することが考えられる。これは先に述べたブリッジとしての方向性とよく調和する方法である。ただし、Leading Edge Issues in Kagawa Universityからの教訓として、様々な専門を背景に持つ学生たちに共通の授業を英語で提供する場合には、特に難易度や内容に関する配慮が必要である。この方向性は、数の面のみではなく、内容の充実にもつながるものである。しかし、各学部に提供していただくとしても、主な対象が交換留学生のみでは難しい等、実現には様々な困難も予想される。

３つ目の方向性としては、本プログラムのさらなる特徴づけが挙げられる。ここでは、上記の科目の多様化以外の特徴づけを考えたい。プログラムを特徴づける要素として、より香川県について深く探求する部分を入れることができれば、それは訴求力を持つであろう。一方で、特定の専門的知識がなければ難しいという状態にすることは望ましくない。あるいは、この特徴づけが本プログラムの汎用性を下げるものであってはならない。以上の条件において、2020年度より、「プロジェクトさぬき」について、香川県に関するテーマを扱うという元々の特徴は残しつつ、学外の団体等と連携し、瀬戸内海に焦点を当てた形での実施を検討中である。そうすることにより、より深化した異文化交流が促進できるとともに、SDGs「14. 海の豊かさを守ろう」についても貢献することが可能になるだろう。

さらに、留学生数の増加に関しては、新たに開始された本学の優先枠を活用することで、留学しにくかった国からの留学生を呼ぶことを2020年度より試行する。これは、以前日本学生支援機構の奨学金が得られた際、多くの学生を受け入れることができた経験に基づく。またこのような手段を用いなくても経済的に余裕のある国の協定大学からも、特に今まで本プログラムに学生が参加していないところには再度お誘いをしていく。

これらの方法により、プログラムの内容充実及び留学生の受け入れ数増加を図り、さぬきプログラムのみではなくその後のより長期の留学へも学生を誘導し、本プログラムを日本人学生と留学生の共修のプラットフォームとすることで、大学全体のキャンパスの国際化に貢献していきたいと考えている。

文末注

⑴　高水・塩井2018：41に特別講義の例を掲載している。

⑵　表１において、それ以前にも台湾の学生が１名存在しているが、これはやや特殊な事情での受け入れであるため、ここでは他とは別の扱いにしている。なお、最近本学は国立嘉義大学との交流に力を入れているところである。

⑶　この冊子は、高水・塩井2018：41のSanuki Program Magazineにおけるアイディアは継承しているが、これ自体とは異なるものである。2017年度の試みは継続が困難で、その後は作成していなかった。

参考文献

塩井　実香. 2019.「留学生センター日本語教育カリキュラム等」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』10：122-131.

高水　徹・塩井 実香. 2018.「さぬきプログラム」『香川大学インターナショナルオフィス年報』9：39-42.

『香川大学留学生センター　日本語語学研修プログラム報告書（第１回～第10回）』2011. 香川大学インターナショナルオフィス留学生センター 日本語語学研修プログラム報告書編集委員会（編）.

『香川大学留学生センター　日本語語学研修プログラム報告書（第11回～第20回）』2015. 香川大学インターナショナルオフィス留学生センター 日本語語学研修プログラム報告書編集委員会（編）.